の意に反して被災者側にたって復興予算をばらまく。被災地の地方公務員だけでなく、その活 給料やボーナスを減らされて退職金までもカットされた公務員がついに立ち上がった。 政府

5 4

目覚めた公務員

動と住民

の熱烈な感激が、

被災地以外の地方公務員まで動かす。

率化した。 そして不正受給者を摘発して公平に執行される。これまでと違って行政が信じられないほど効 補 助金は適正、 歯車がかみ合って前に進みだすと事態は好転する一方で住民もポジティブに行動す 適切に、 しかも迅速に被災者や本当に生活に困窮している住民に給付された。

「目覚し時計が鳴ってもなかなか起きなかったのに、 時計が鳴る前に起きて今日もいい日にし

るようになった。そのような具体例が次々とテレビに映される。

ようと頑張っているように見えませんか」

本の声がテレビから漏れると田中が応じる。

山

「公務員 が本気になって仕事をすればすごいな。 役所に勤めたら休まず遅れず働かず……何て

言っていたから、 適当な人が就職していたと思っていたけれど、本当は優秀な人が集まってい

「この前 おもむろに身分証明書を出そうとすると『私は何度も大家さんにお会いしてます。本人 ŧ 前 鑑 証明書を取りに行ったら『大家さんですね。今日も暑いですね』と声をか けら

目覚めた公務員 4

> 「じゃが、銀行の窓口は相変わらず本人確認がきびしい」 寸. 派な服の大家が質素な服の大家に首を横に振る。すぐさま質素な服の大家が続ける。

確認は不要です。すぐ出しますから、しばらくお待ちください』なんていわれて恐縮したぞ」

請書類に書きこみます。すべての住民の顔と名前を覚えるのは不可能ですが、よく来られる方 確かにそうだ。そのことを役所の窓口でいうと『私は大家さんの顔を見て本人確認済みと申

の顔と名前を覚えることは市役所の職員の義務です』と言われた」

を言うんじゃ?」 「でも、申請書類に免許証のコピーを貼り付けておかないと、本人確認チェック担当官が文句 「そうではない」

*

意外なセリフに田中が目を丸くする。

「今はコンピュータの時代だ」

田中と立派な服の大家が首を傾げる。

「お待たせしました。三五番の札をお持ちの方、三番窓口にお越しください」

の大家が立ち上がるとくたびれた鞄を持ってカウンターに向かう。

質素な服

しれないと番号でお呼びしました」 質素な服 の大家さんですね。お名前でお呼びしてもよかったのですが、差し障りがあるかも 目覚めた公務員

カウンターの中で若い女性の職員が頭を下げると笑顔を上げる。

「印鑑証明書、一通ですね。一通五百円です。二通で千円」

「しまった!支払いは印紙だったのう。印紙を買ってくる」

「いえ。ここで現金でお支払いください」

質素な服の大家がくたびれた鞄を開けて財布を取り出す。

「分かりました」 「千円、千円。ないなあ。一万円札でお願いできるかな」

の千円札を確認して手渡す。 「まるで銀行みたいだな」

一万円札を受け取ったその事務員は右横の読取機にお札を入れると、出てきたお釣りの九枚

市長が『市民をお客様だと思って事務をしろ』というので、このようになりました。 「『ここで印鑑証明を手渡してあっちで支払え』というのが今までの市役所のやり方でした。

「最近、市長の評判は悪いが、やるべきことはキチンとやっているんだな」

「ありがとうございます。またのご利用をお待ちしております」

「ちょっと待った」

質素な服の大家は手続き待ちの人がいないか後ろを気にしながら尋ねる。

「質素な服の大家さんの場合、要りません」

「本人確認は?」

「仕事の邪魔をして悪いが、なぜだ」 前 回の記録がコンピュータに残っています。 請求に来られた年月日、時刻、 対応窓

口番号、

応対職員名などです。前回も私でした。そのときに本人確認をしています。あとで本人確認を したかどうか検査されても、 前回の資料を今回の申請書に電子コピーしますので問題がな いの

「電子コピー?まあ、 いいか。とにかく市民の負担が減るし、 効率的だな」

員の意識は変わりました。今後も当市役所を徹底的にご利用くださいますようお願い申しあげ 「いままで非常にご不便、ご迷惑をおかけしましたが、これからは違います。 市役所の職員全

*

その職員は立ち上がると深々と頭を下げる。

「むしろ気持ち悪かった」

立派 な服 の大家がいったん言葉を切った質素な服の大家に疑いの視線を向ける。

おまえ、 騙されたんじゃ」

「そんなことはない。なんなら、今から印鑑証明書を取りに行けばいい」

170

認を求められた。

当然クレームをつけた」

立派な服の大家が詫びると質素な服の大家が気にせずに続ける。

「冗談、

冗談」

「そのあと、 わしはその印鑑証明書を持って銀行に行った」

借金か」

立派な服の大家の言葉に質素な服の大家がムッとするが、 素直に頷く。

「ところが様々な手続きの中で必ず本人確認があるのだ。もちろん、席を立つ訳ではないから

「そりや、そうじゃろ」

確認は一回だけだったが……」

銀行員は慇懃無礼だ。 幸いわしは借金がないからいいようなもの、 借金している者は大変じ 「ところがだ。同じ担当者が振込の手続きでわしを窓口に連れて行ったとたん、そこで本人確

銀行員の一言で自殺した者をわしは何人も知っておる。一方、当の銀行員はシャーシャー

「だからその銀行員に市役所の職員の対応を披露した」 質素な服 の大家が立派な服の大家に頷きながらも手を上げて言葉を遮断する。 としておるのじゃ」

田 中が合いの手を入れる。

金融庁からお叱りを受けます』と」 「こう、のたまいおった『彼らは気楽な公務員です。しかし、私どもは何かあったら財務省や

いったん言葉を止めてから質素な服の大家が

続ける。

「だったら、『お叱りを受けない対策をすればいいのでは』と提案したが、

答えずにただ笑っ

ていた」

画 [面には変身した公務員の活躍と違和感ある民間会社の対応の様々な映像が流れる。

「意外だ」

ガス会社、マスコミ関係の会社……その類いの会社の様々な対応姿勢の映像が流れる。 に市役所の対応に比べて見劣りする。そして逆田の興奮した声が流れる。 そして引き続きテレビには許認可が必要な業種、つまり銀行、 証券会社、 保険会社、 明らか 電力や

けではなく、こともあろうかこの悪しき循環を温存した。 ち切ろうと選挙で新しい政権が誕生したが、その政権は悪循環を断ち切るチャンスを逃しただ 加速させた。 政府自体 ら世知辛くなった。そのような環境を変えようとせずにチェック体制の強化ばかりに奔走した 「要はキチンと信頼関係が保たれていればルールは不要です。ギスギスした世の中になったか :が人間関係を不安定化させた。その原因は政府の保身です。さらに政治不信がそれを 加速すると元に戻るどころかより厳しいルール作りに邁進した。 しかし、 我が市の市長はこの悪循環 この悪循環を断

その結果は冒頭のごとくだった。 僚を尻目に公務員、つまり下級官僚が立ち上がった。

な政権に協力した高級官僚は復帰した与党との付き合いに神経を使う。しかし、 政権を取られた元与党が政権に返り咲くと目先を変えたが本質は変わらない。 そんな高級官 いったん新た

「公務員と言えば、最近税務署員は税務署を退職しても再就職するらしい」

5 5

人事のこと

質素な服の大家の発言に田中が反論する。

「税理士にならないのですか」

「このテレビでもそんなことを放送していたな(「31 キャリア」参照)」

「昔は退職したら国税局が顧問先を斡旋していたが、世間の批判に耐えきれなくなって、この

斡旋制度を廃止したのだ」

立派な服の大家が合流する。

年延長をせざるを得なくなったのじゃ」 自分で客を探すのはむずかしいから、それに定年延長を推進している政府としては自らも定

と言いながら田中がテレビを見つめる。

「大概、ここで電源が入るんだが……」

プツンと電源が入ると画面に山本が現れる。

「わしも自信があっての発言ではない」 「ご要望にお応えしました。ところで立派な服の大家さんの定年延長説は間違いです」

「うーん。定年延長と再雇用というのは違うんですか」 「定年延長ではなく再雇用です」

「もちろん違います。定年延長はその組織の全員に適用されます。定年を六十歳から六十五歳 田 中が代表して質問する。

に変更すれば全員六十五歳まで働くことができます」 質素な服の大家が質問しようとするが山本に遮られる。

「あくまでも一言で説明すればと言うことで細かいことは説明しません。と言うより知らない 「一方、再雇用には何歳までという保証はありません。要は一年ごとの更新契約です」 山本が会釈すると続ける。

「一年間の働きぶりを見て次の再雇用を拒否できるのか」

質素な服の大家が切り込む。

「『こいつ、働きが悪いから首を切ってやろう』ということはできないのか」

「公務員の場合、悪いことをしないかぎり首になることはありません」

「そうです。公務員には民間企業のような失業保険制度はありません。もちろん、公務員はな

ぜ失業保険がないのかなんて疑問に思うこともなく給与明細書を見ているでしょうが……」 「そういえば、給料をもらっていた頃、失業保険料が天引きされていた。金額はわずかだった

「もちろん、税理士にもならず、

「えー。どうやって食っていくんだ」

けれど。でも公務員はいいなあ」 再雇用になれば失業保険はどうなる?」

「うーん。分かりません。想定外の質問には応えられません」

「マスコミ本来の義務を放棄したな」

質素な服の大家が抗議すると山本の横に逆田が現れる。

「私の監督不行届。誠に申し訳ありません」

逆田が頭を下げると山本も頭を下げる。

*

再雇用も申請しないという道があります」

自分のことを忘れて田中が驚くと質素な服の大家が続く。

「公務員の場合、退職金や年金が優遇されているからな」

ナスや給料がカットされたといっても、就職してから退職するまでの生涯賃金はかなり多いの 「上場企業はともかく中小企業と比べればうらやむほどの退職金や年金を受け取れます。ボー

ここで田中が伏線を込めた質問めいた言葉を山本に向ける。 要は蓄えがあればあくせく働かなくても済みます」

「退職した税務職員は通常再雇用されるか、頑張って税理士事務所を開くかの、どちらかなの

5

「あります。というより、すごい事をしようと数人の元税務職員が決起しました」

でしょうが、そして働かないという道があるのも分かりました。その他に道はあるのですか。

あるのなら……」

田

中が待ってましたと発言する。

「やっぱり!ひょっとしてブログを通じての税制改正提案のことですか」

「そうです」

山本が消えてあるホームページの画面に変わる。

「税務署退職者連合会」

ゴシック体のしかもモノクロの画面が現れる。

「世界一、ダサいホームページです。今まで納税者の方々をいじめてごめんなさい」

ただこれだけ書かれたホームページだった。

「工事中のようです」 「なんだこれは?」

「山本さん!これを見せるために画面から消えたのですか」

画 置 から声だけが聞こえてくる。

「これは、以前、知り合いの記者が取材したある税務署の副署長が中心となって立ち上げたホ

177

「私は心ある退職者で将来の日本を憂う旧職員を集めて政府はもちろんマスコミに向けて現場

*

ムページです。今度は私が取材しました」

から見た税制改正の提言を行うことにしたのです」

「税務署を退官した人は税理士になるケースが多いから、 税理士として提言を行うことはなか

ったのですか」

しようというのかと言うことでしょ」 「ご質問の意味は、今さらなぜ退職者が、しかも税理士事務所を開業しない者が集まって何を

「そうです」 「今、時代はデフレです」

「『いきなり、何をいうんだ!』でしょ?」

 $\stackrel{-}{?}$

山本は頷くだけだ。

少ないといっても中小企業と比べれば高額です。贅沢しなければデフレの時代ですから何とか

「給料やボーナスは減額され、退職金も思っていた額の七割程度。もちろん大企業と比べれば

生活できます」

淡々としゃべる元副署長に山本はなぜか圧倒される。 数々の取材の修羅場を経験したはずな

人事のこと 5

「国家公務員の人事構成は歪です。まるでインドのカースト制度よりひどいかもしれません」

やっと山本が口を開く。

のに何も言えない。

「そんなにひどいのですか」

「そうです。採用試験で将来うまく行けば省庁のトップの事務次官に出世するコースと、 「キャリア制度のことですね」

ア組とノン・キャリア組に区別されるのです。そのまま退職まで変わりません」 しても小さな出先機関の長にしかなれないコースに分けられています。つまり採用時にキャリ

「民間では考えられないことですね」

「ここで確認しておきますが、キャリア組というのは高級官僚のことです。ノン・キャリア組 「私が言っているのは財務省の人事のことですが、ほかの省庁も似たり寄ったりです」

というのは『下級官僚』……」

ここで元副署長は首を横に振る。

「すいません。言葉が悪いですが、世間では『木っ葉役人』と呼ぶ人もいる。 特に年配者に多

「今思えば、自分たちのこと『下級官僚』と思ったことはないなあ」

179

出世

55 人事のこと

「そのように揶揄されるのは公務員の宿命だと思います」 「そうですか。残念です。でも、その庶民感覚、素直に受け取らなければならない」

山本がかばう。

「いいえ。真摯に受け止めてそんな気持ちを抱く国民の誤解を解消すべきです」

「最近、官庁の窓口はどこも親切だという話をよく聞きます。その中でも税務署は断トツだと

「ありがとうございます。しかし、これも問題があるのです」

£

「そうです」

「親切に納税者に接するのが?」

「それは国税局長が納税者とのトラブルを嫌うからです」 「なぜですか」

想定外の答えに山本が戸惑う。

上させます。そうすると民間企業なら非難を浴びて売上に影響します」 「最近はインターネットの発達で誰でもネットに投稿して、場合によってはホームページを炎

「それは国家として大恥ですから公表しないからです」

「でも各省庁のホームページが炎上したなんて聞いたことはありません」

5

「もちろん」 「税務署長は?」 「国税局長というのはキャリア組ですね」

「ほとんどがノン・キャリア組です」

「ほとんどというのは?」

「ほんの一握りの税務署に二十歳代後半のキャリア組が署長として中央から赴任してくるので

「待ってください。ノン・キャリア組の職員は出世してもなかなか署長にはなれないんでし

「そんなポストを二十歳代後半で就任するんですか?」

「そうです。私も副署長で退職しました。どちらかというと出世した方です」

「あまりにも若すぎて現場が混乱するということで最近は三○歳前半で署長になることに変更

「それが公務員の人事です」 「いずれにしても副署長から見れば子供じゃないですか!」 されました」

られない!」 族会社を除いて民間ではあり得ないわ!国家を運営する組織が同族会社と同じなんて信じ

興奮する山本の横に逆田が現れる。

*

「大変失礼しました。 取材する者が興奮して、肝心の質問を忘れてしまったようです」

「いえ、そうでもありません」

元副署長の言葉に逆田が驚く。

「キャリア組は現場を知らない、 なければなりませんから、大事に扱います。もちろん彼らは税法自体を知りません。彼ら あるいは現場に赴いても子供ですし、無事に本庁に戻っても

はチヤホヤされて本当の現場を知らずに本庁に帰っていきます」 ってマイナス経験になる!」 「そんな!それじゃ貴重な現場を体験する機会が生かされないばかりか、

はなりたくな 「税務署長の仕事は激務そのものです。ノン・、キャリア組の我々でさえも、できれば署長に 副署長で退職した私はある意味幸せ者です」

元 .副署長がフーッとため息をもらす。

は税務署長 ら東北国税局長として、そのエリアの税務署を管轄する局長になって赴任します。 んな局長ですからノン・キャリア組の税務職員はバカ殿に仕える哀れな公務員です。逆説的に 「ところがやがて国税局長として、たとえば関西であれば近畿国税局長、 の比ではありません。そうなると今度は自分に責任が及ばないように保身する。そ 東北大震災の地域な 局長 の責任

若いキャリア組にと

人事のこと

言えば局長は裸の王様です」

「さて、そろそろ、本題に入りましょうか」 迫力ある言葉に逆田も、もちろん山本も狼狽える。

「そうです。我々元税務職員の共同提案です」 「本題?」

「あっ!そうでした」

「政府はデフレ脱却のために第一の矢、第二の矢、第三の矢とか言っていますが、その第三の

「分かりました」

矢について提言があります」

「まず、第三の矢の意味を復習しましょう」

やっと逆田が落ち着きを取り戻す。

同じく平常心に戻った山本が説明を始める。

その利益を従業員のベースアップにというのが第三の矢です。給料を増やして本格的なデフレ

「金利政策や円安政策で輸出関連の大企業と一部の中小企業では大幅に収益が改善されました。

ここで元副署長が発言する。

脱却を計って景気を浮揚させようという作戦です」

「そうです。しかし、グローバル化した世界でそう簡単に企業は給料を増やすことはしません。

「そのとおりです。

「と言いますと?」

人事のこ 5

もし強制すれば日本は社会主義国家になります」

利益はできるだけ留保したいはずです。政府がいくらお願いしても、利益をどう使うかは企業

これ以上発言されると自分の立場がないと言わんばかりに逆田が待ったを掛ける。

「政府は前年以上に給料を増額すれば税金をまけるという方針を打ち出しましたね」

それにすでにかなり法人税率は低いし、その低い法人税率さえもっと下げるとまで言っていま 「この方策で大きなインセンティブを企業に与えることはできません。まずハードルが高

「そうだとすれば、給料を上げずに多少法人税を払ってでも資金を貯め込むでしょうね」

特に借金地獄を味わった企業は必要以上に資金を留保するはずです」

「さらに税金をまけるという消極的なやり方はあまり効果がありません」

を加算するという特例に敏感だと感じます」 「税務調査をしていますと、企業は税金をまけるという特例より、逆にある利益に対して税金

言うことですか?」 「ご褒美をもらおうとウソをつくより、ペナルティーを避けようと誤魔化すことの方が多いと

しています。そうであればなおいっそう低くするという餌より、政府の意向に従わなければそ 「国際的に高いというより、経営者は過去の法人税率と比べて十分低くなっていることを実感

「なるほど。ところで企業に給料を上げる妙案があるのですか」

の分に特別高い税率を適用するといった方が強いインセンティブを与えます」

「えー!~ぃ「あります」

「えー!それは?」

 $\stackrel{-}{?}$

するのです」

留保金課税です」

5 6

留保金課税

「随分前、実質的に廃止されました。 留保金課税?」

「どういう制度だったのですか」

「主に同族会社に適用された制度で、 儲けても配当しないと通常の法人税率に上乗せして課税

税務職員でも知っている人は四十代後半以上でしょう」

元副署長の説明に誰もが疑問符で応える。

え零細企業でしょう。資金力がありませんから、 「同族会社の場合、 利益が出てもほとんど配当しないのです。同族会社といえば中小企業、い 儲けた金を貯め込もうとします」

全員が「ふんふん」と頷くが、山本だけが違った。

「中小企業の株主は配当を欲しがらないのですか」

「それは欲しいでしょう」

立派な服 の大家が続く。

「なぜ配当しないのじゃ。 同族会社の場合、 たいがい社長自身が株主じや」

留保金課税 5 6

- 簡単に言うと配当は経費にはなりません。配当しても利益の額は変わりません。配当という

のは

利益の分配なのです」

「利益すべてを配当に回しても税金は安くならないということか」

「そうです。 画 「面の中で元副署長が電子黒板に「100」と書きこむ。 仮に利益、税法では課税所得といいますが、それが100だとしましょう」

「法人税率が20パーセントだとすると税金は20ですね」

元副署長の横にいる山本も逆田も電子黒板を見つめたままだ。

も20の税金は納付しなければなりません」 「この利益の半分を配当に回したとしましょう。 でも法人税は20のままです。 100儲けて

田 中が思わず声に出す。

「それでは資金は30しか残らない。 配当しなければ80残るのに」

「それに配当をもらった人には所得税がかかるわ」 「国はその配当にかかる税金も欲しいのです」

「それは国の勝手だ」

税務署の勝手ではありません」

間 一髪、 元副署長が言葉を挟む。

「政府に頼まれて財務省の職員が法律案を作成しますが、それを法律にするのは国会議員です。

ます」

留保金課税 5 6

> つまり選挙 すかさず山本が横槍を入れる。 で選ばれた議員です」

「その話はあとでお聞きするとして……」

元副署長が山本を制する。

「始めに長々と公務員の人事について申し上げたのは訳あってのことなのです」

山本は 元副署長に身を乗りだすが逆田が止める。

「法律の原案を作るのはキャリア組ではありません。

現場を知っているノン・キャリアが作り

うまく答弁できなければ四十歳前後の方が対応していたわ」

「そういえば記者会見で法案の中身について質問すると、局長ではなく年配の方が、

「現場を知らなければ何もできません。私はそれを言いたかったのです。日本の法律の根本は

ノン・キャリアが支えています」

「それじゃ、ノン・キャリアの税務職員が税法を作っていることになるぞ」 質素な服の大家の迫力ある言葉が元副署長に向かう。

「そうではありません。少し誤解があったようです」 元副署長が一息入れると続ける。

「人事の話の中で採用試験によって将来が決まってしまうとお話ししましたね」

それでも

「は

い。その試験で事務次官にまで上り詰める人と出世しても署長にしかなれない人に区別さ

用試験に合格したのではなく、本来才能がある人が現場で経験を積めばすごい才能を発揮する られません。そのような人は下級試験しか受けることができません。私のような盆暗で偶然採 「ある事情で、たとえば学費が出せない恵まれない家庭で育った高校卒業生は上級試験を受け

「よく分かりました。そういう元副署長もすごい才能をお持ちですね」 しかし、元副署長は反応することなく話を元に戻す。

ことがあるのです」

すべての企業に、儲けても給料を上げなければ追加の課税をするというのが、私の提言です」 「追加課税されるぐらいだったら、従業員に喜ばれる給料アップの道を選ぶでしょうね」

「さて留保金課税ですが、配当の場合と違って、しかも同族会社や中小企業のことではなく、

「しかも上げた給料は経費になりますから、そのぶん法人税も安くなる」

元 .副署長が電子黒板に書きこむ。

「先ほどの配当の場合と同じ数字で説明しましょう」 中が代表して画面 の元副署長に声をかける。

「今度は配当の代わりに給料を上げるのですね

「そうです。まず100の利益。法人税率は20パーセント。このままでは税金は20です。

留保金課税

「たとえば50上げるべき給料を上げずに、つまり留保したという前提で説明しましょう。こ 「給料を上げなければ?」 ここで給料を50上げた場合を考えてみます。利益は当然その分だけ減って50になります。

そうすると税金は10に減ります」

の50にもう一度法人税率の20パーセントを課税するというペナルティーを課します」

「元々の20にプラス10。合計30。わあ!三倍にもなる」

「この20パーセントの追加課税の税率を、このケースで50のうち25については40パー

セントにすればどうですか」

の税金が20ですから全部で35になりますね。給料を上げた場合の三・五倍か。ふー」 「25の40パーセントですから10。残りの25については20パーセントだから5。元々

「ここで企業もやむを得ず25だけ給料を上げていたらどうでしょうか」

「利益は25減って75で、これに20パーセントかけると15ですね。それに給料に引き上

げが25。つまり本来の引き上げ額の半分だから、25に……掛ける税率は40ではなく20

パーセントでいいのですね」

「そのとおりです。半分義務を果たしたと考えます」

「この留保金課税がない場合と同じ20です」 「すると5だから、合計20。それでも給料を50上げた場合の二倍」

「給料を50上げるのは無理でも25上げようとするだろう」 これまで黙っていた質素な服の大家が画面に向かって感想をもらす。

立派な服の大家が追従する。

「最低、高いペナルティーだけは避けようとするはずじゃ」

らには将来をも見すえて給料の額を決める必要があります。あるいは新規採用も考えなければ 増加がなかった場合と比べて課税する制度です。経営者は一年間の売上と経費を見越して、さ 場合はその年の基本給全額が対象です。要は一年前よりどれだけ月給が増えたかによってその 「そのとおりです。この給料に関する留保金課税は基本給の増加を対象とします。新入社員の

「経営者には厳しい判断を強いられるな」

なりません。もちろん赤字なら留保金課税される余地はありません」

世界経済 「経営者であれば当然で漫然とした経営はできません。中小企業といえどもグローバル化した の中で生き残るには、むしろ人材をどう生かすかという意味で、意外とこの留保金課

山本が期待感を持って尋ねる。

税制度が後押しをするかもしれません」

「いつ、この留保金課税制度を提案されるのですか」

明日 ホームページで提案します。反応を待って政府には数日以内に直接提案するつもりで

- 191 -

5 6

ルを逸脱しています」

すれば危険ですね」

ンペーンを張りましょう」

「分かりました。

私たちもその内容を検討して『なるほど』という感触を得れば大々的にキャ

「ありがとうございます。しかし……」

山本が首を傾げる。

「今の政府のやり方は体のいい独裁的なやり方です」

「と言いますと?」

「言葉は柔らかいですが『法人税はまけてやる。復興特別税も免除してやる。だから給料を上

げろ』というのは独裁政治に近い」 「おっしゃるとおりですね。気が付いたら何でも『要請』という名の命令で政治を動かそうと

行する。それが法治国家というものです。今も政府のやり方はソフトに見えますが、本来のル 「そうです。きっちりと法案を練りあげて国会で審議して法律を作る。そして法律で政策を実

192

56 留保金課税

56 留保金課税